# 福祉とロボット技術——特別セッションへの期待

（社）日本ロボット学会　会長
木下　源一郎

本セッションのタイトルを見て，私は「福祉工学」のキーワードを思い出し，と同時に，この福祉を支える技術はロボット工学そのものと言っても過言なく，その興味の視点は共通すると思いました．

福祉の対象の１例として，義肢の歴史を紐解くと紀元前４８４年に遡り，ギリシャの歴史家，ヘロドトスの著作に登場しております．今世紀で見てみますと，我が国では満州事変後に作業用義手の研究が始められております．そして，戦争の度に，多くの犠牲者に対する償いとして義肢の研究が進められてきました．また，１９５８年のサリドマイド薬禍によるサリドマイド児の多発に基づいても義手開発が進められております．

このように，義肢は戦争や事故を契機に，その時代の先端技術に基づいて開発が進められてきました．今後，高齢化が進み，多くのお年寄りが健康で，生き甲斐をもって，充実した日々が送れるような支援，すなわち，高齢化社会の介護介助問題が課題となりつつあります．言い換えると，戦後の高度成長期を支えてきた人たちが介護介助支援を受ける時代となりつつあるのです．私自身の立場で考えてみてもあと１０年程のことで，１０年はあっという間に過ぎてしまうかもしれません．

さて，従来は戦争の契機で義肢研究が加速されたという側面を持っておりますが，我々が今後抱える問題はそれとは少し性質が異なっているようです．すなわち，高齢化社会とは戦後のベビーブームの人達が高齢に達し，同時に少子化が追い打ちをかけた社会構造となっていることです．そして，寝たきり，痴呆といった高齢化に伴う種々の病，そして身体的な衰えに対応する広範囲の介護介助支援が必要不可欠なことで，それを金銭的に，物理的に支える若年層の数が極端に低いと言うことです．

したがって，この人手不足と資金力を解決するために，ロボットの活用が有効となるでしょう．介護介助は人手が基本となるので，このためにロボット支援によって，欠如した部分の補助，支援を行うことになります．

本特別セッションでは，この福祉の現場の紹介とロボット技術の支援について，現在一戦で活躍している方々のご講演，パネルデイスカッションが企画されております．本企画にご参加いただき，福祉を目的としたロボット技術の現状とその可能性についてご理解いただければ幸いです．